

〈十二〉檸檬①

一 要約の解答例

私は、えたいの知れない不吉な感情をもちつつも、街から街へとさまよい歩いていた。毎日深酒して、不健康ですさんだ生活や借金に加え、漠然とした焦燥や嫌悪感を抱え、自分が住んでいる町、京都から逃げ出し、誰一人知らないところへ行きたいと思っていた。ある果物屋の前で足を止めた。悲鬱な気持ちの中、低く下がった電燈の光がそこだけ絢爛と美しい眺めを照らし出していた。

◆【解説】

この問題は、本文全体の内容を二百字程度にまとめる要約問題である。要約では本文が何について語っているかを中心に、重要部分だけを残してまとめることがポイントである。以下に、この問題を解く手順を示す。

(1) まず本文の中心的な出来事をつかむ

■ 本文にはいろいろな描写があるが、中心となるのは次の流れである。語り手(私)は毎日深酒をし、健康も生活も乱れている↓不安や焦燥、嫌悪感に包まれて町をさまよっている↓京都から逃げ出したいと思っている↓そんな中で、暗い通りの果物屋だけが不思議に美しく見える。つまり、本文は「暗い精神状態の主人公が、果物屋の光景に心を引かれる」という流れである。要約ではこの流れを外さないことが第一条件である。

(2) “装飾的な描写”は削り、状態・行動・心情だけ残す

■ 本文には、街の様子の細かな描写、品物の色や並び、店の雰囲気、その他の詩的な表現など、文学的な描写がたくさんある。しかし、要約では削除してよい部分である。残すべきは、「主人公の状態(深酒・不健康・借金)」、「主人公の心情(焦燥・嫌悪・不吉な感情)」、「行動(町をさまよう・果物屋の前で立ち止まる)」、「光景に心がとまる」であり、これらだけをまとめると、自然に核心だけの要約になる。

(3) 文章の順番はそのまま流れを追って短く書く

■ 要約は次の順に並べると綺麗にまとまる。

- ・主人公の状態・問題
- ・主人公の心の不安定さ
- ・街をさまよう行動
- ・果物屋の光景が印象的だったこと

主人公の感情の変化を入れると、要約の質が上がる。要約の文量は決まっているが、ずっと暗い心境・光景に心が動くなど、わずかな心情の動きを書くと、要約の完成度が上がる。

〈十三〉檸檬②

一 要約の解答例

私はその店で檸檬を一つ買った。檸檬の色や形や重み、感触や匂いに元気が蘇ってきた。そこで、以前は好きだったが今では苦手に感じる丸善で、丸善の書棚をラベルごとめくる気持ちにならぬよう檸檬を置いた。画集を何冊も積み重ね、その上に檸檬を置いてそのまま店を出るのだ。黄金色の爆弾が美術の棚を中心に大爆発をしたという想像に、私の心は軽くなった。

◆【解説】

この要約問題では、「本文の流れ」と「主人公の気持ちの変化」に注目することが大切である。

(1) まず「出来事」の流れをつかむ

■ 本文では、主人公が檸檬を買う↓その檸檬によって気分が変わる↓丸善で画集を積み、檸檬を置く↓それを「爆弾」のように想像し、気持ちが晴れるという順で行動している。要約では、この「流れ」を保ったまま、細かい描写を削ることがポイントである。

(2) 次に「気持ちのポイント」をとらえる

■ 主人公の気持ちは次のように変化している。沈んだ気分であった主人公が、檸檬に触れることで元気を取り戻す↓丸善での爆弾の想像が爽快感を生み、気持ちが晴れる。要約では、この「気分の回復」をしっかりと書くと、本文の本質を押さえた内容になる。

(3) 文章量を意識して、重複を削る

■ 文字数に制限があるため、同じ意味の繰り返し、細部の形容語、場面の細かい描写は削ってもよい部分である。檸檬を買った↓元気が出た↓丸善で檸檬を置いた↓想像して気分が晴れたという重要部分だけを残す。

二

かたまり	せんとくもの	にお	しよっかく
塊	洗濯物	臭い	触覚
きゆうかく	さっかく	こくめい	しんぼう
嗅覚	錯覚	克明	辛抱
だがし	おもむき	ほこり	ろこつ
駄菓子	趣	埃	露骨
がらす	たな	あっかん	いろど
硝子	棚	悪漢	彩る